

保育者のための総合音楽講座 no.2

仲 嶺 まり子

A Report of the 2nd Lecture on Music and
Movement for Childcare Workers (2)

Mariko NAKAMINE

はじめに

平成15年10月～平成16年2月にかけて、リカレント教育の一環として「第1回保育者のための総合音楽講座」を開催し、『初等教育—研究と実践—第34号』（別府大学短期大学部初等教育科児童学会 2004年3月）においてその報告をおこなった。さらにその継続として、平成16年10月～平成17年2月にかけて「第2回保育者のための総合音楽講座」を実施した。今回は、この第2回総合音楽講座の内容報告を中心に、保育者を対象としたリカレント教育としての音楽研修について考察していきたいと考えている。

講座における基礎理念

保育者のための音楽研修においては、限られた時間での音楽学習という観点から、音楽活動によって獲得される音楽的成果を目的とするというよりも、音楽活動を通して〈音とからだ〉、〈音とところ〉のつながりを経験することでより深い感性の目覚めとからだの解放を目的とし、そのことが日常保育におけるさまざまな場面で子どもたちとの共感的ふれあいに貢献できればと考えるのである。

もちろん教材の提供は重要な内容のひとつで

あるが、ハウツー的なものだけを追うのではなく、保育者にさまざまな音楽場面を提供し経験してもらうことで、「幼児と音楽」についての多様性、生活や遊びと結びついた活動のあり方を探り、保育における音楽表現のアイディアの広がりをねらいとしているのである。

これらの理念のもとに以下の①～⑤に分けて、研修内容にはリトミック的側面の導入を試みた。① 音楽を聞いて動く ② 音楽を通しての共感 ③ 音楽を聞いて表現する ④ 音楽での応答 ⑤ 想像と創造等を取り入れることで自身のからだへの気づき、音楽表現活動における「音楽と動き」が、他者との関係において展開されていることへの意識化を図ろうとする試みでもある。

音楽表現活動における「音楽と動き」の内容分類

前回の報告において、音楽表現活動における「音楽と動き」の内容分類については、項目ごとに詳しい内容説明をおこなっているため、今回は項目のみを掲載する。

- ① 歌の歌詞に合わせて動きをつけていく
- ② 歌の部分リズムに合わせて動きをつけていく
- ③ 歌とリズムや模倣表現を関連させる活動
- ④ 音や声、リズムを利用した動きや模倣活

動

- ⑤ リズム体操やリズムダンス
- ⑥ 総合的な表現活動

前回、これらの項目をもとに活動内容を考案し、さらにそれらの活動と項目がどのように関連しているのかという説明を加えながら実技と講義を進めていった結果、「音楽が身近なところ、生活の中にたくさんころがっている」「音楽の感じ方の幅を広げることが大切」「体を動かすことで発散や交流ができた」等の感想を得ることができ、基礎理念の方向性に確信を持つことができた。そのため、第2回も第1回同様、これらの内容分類を参考に活動内容の考案をおこない、さらに一人一人がリーダー的経験ができるよう留意した。

講座内容のまとめ

講座の開催は、第1回と同様大分県立総合文化センター（スペースBE）において、担当年齢別に2つのグループに分けそれぞれ2回シリーズ（定員20名）でおこなった。4、5歳児担当者対象は平成16年10月・12月、2、3歳児担当者は平成17年1月・2月の平日19:00～21:00に実施した。つまり、これらの講座開催により、第1回に続く継続的な音楽研修を実現することができたのである。

【4、5歳児担当者対象の主な内容】

1. 歌の歌詞に合わせて動きをつけていく

A. 「せんたくもの」（後藤紀子 詞・曲）

歌に合わせて、2人で汚れたせんたくものになって抱き合ったり、背中合わせをして体をゆらしながら音楽を楽しむ。

短いながらも日常手軽に体遊びのおこなえる歌として取り上げた。

2. 歌の部分リズムに合わせて動きをつけていく

A. 「しあわせなら ○○さん」（アレンジ者不明）

○○さん部分で、返事・動物の鳴き声・乗り物の音・楽器の音・雨や風の音などの声を使って答える遊びをおこなった。はじめは緊張していたせいか言葉で答えていたが、徐々に動作をつけて声や言葉に工夫する姿が見られるようになっていた。よく知られている歌の部分リズムを利用した遊びであるが、動きだけでなくいろいろな声を出す活動としても有効であった。

また、リーダーになり参加者を指導する教材としても、誰もが取り組めて適正であった。

B. 「かわいいオーガSTEIN」（外国曲 新沢としひこ 詞）

この曲では同じリズムがくり返されるため、楽器の交互奏や、歌詞の中に出てくるいろいろな動物の模倣表現や鳴き真似をリズムにのって楽しむことができた。

3. 歌とリズムや模倣表現を関連させる活動

A. 「セブンステップス」（アメリカ曲）

2人組になり、歌に合わせて振り付け通りにダンスをして、まず曲に親しんだ。次に歌いながら動けるようになったところで、一人がリーダーとなり、＜動きの創作と模倣＞をおこなった。この場合、歌詞に左右されないようにラララに歌詞を変えた。

① リーダーが歌のリズムフレーズに合わせて自由にステップし、最後にポーズをつくる。次の同型リズムフレーズでもう一人がリーダーの後を追いかけて、同様にポーズで止まる。役割交替やメンバーチェンジをおこないながら移動運動を繰り返す。

まず、教室を自由に動き回ること、空間を認識していくという活動である。

② ①では、前者を追いかけるという活動であったが、次に2人で向き合い、リーダーが歌のリズムに合わせて簡単な動きをつくる。次のフレーズでもう一人がリーダーの

真似をする。この活動では、模倣だけではなく、相手の動きを観察しながら相手の息づかいを感じとるということをねらいとしている。

③ ①と②を「サンタクロース」(フランス曲)でおこなってみる。この場合、4拍ごとのはい交互となるため、できるだけ集中しリズムの流れをつくれるよう留意した。

④ フープを鏡として代用し、ミラー表現をおこなう。

3人組になり、一人がフープを持ち、その両側に二人が向きあって立ち、「セブンステップス」のリズムに合わせてミラー表現をおこなう。顔の表情を変化させたり、手の表現に工夫を凝らしたり等、より高度な表現技術の求められる内容であったが、フープが間にあることで非常に緊張度の高い活動でもあった。

B. 「くり くり くり」(石丸由理 詞・曲)

歌詞を全て“くり”に変えて簡単にし、歌いながら動けるようにした。

紙で作ったかごを手に持ち、中音ではピアノに合わせてスキップし、高音では木の実を、低音ではくりをひろい、かごに入れていくという活動をおこなった。美味しい木の実や大きなくりをひろうという目的により、イメージの描きやすい活動となっていた。

さらに、木の実採りやくりひろいの際には、リーダーになった先生がいろいろな言葉かけをおこなうようにし、子どもとの言葉のやりとりを通して、子どもたちがより主体的に活動がおこなえるような関わりについて提案した。

C. 「コンコンクシャン」(香山美子 詞 湯山昭 曲)

歌をうたいながら森にクシャミ仲間を探しに行くというストーリー展開で活動をおこなった。クシャミ仲間が見つかる、ピアノの合図でみんなでクシャミをするという遊びを

おこなった。

リーダーがピアノを担当したが、右手の重音奏法のための合図にしたため、ピアノの苦手な先生も安心して弾いていた。

D. 「○△□カード」でリズムング

クリアファイルの中に大小の○カードをはさみ、それを持って「いとまき」の曲に合わせてステップし、ピアノが止まると同じ大きさのカードの人(違う大きさのカードの人)とファイルを合わせ、向かいあったまま「オブラディ オブラダ」(ビートルズ 曲)に合わせて2人で自由にダンスをする。

前述の活動も楽しいのだが、さらに手のひらに○△□のカードを貼り付け、同じカードの人と2人組になって同様の活動をおこなう。この場合、互いの手を合わせるため、より相手の体に近づきコミュニケーションが深まるのである。カードという媒体を通してのコミュニケーション活動であるとともに、音楽を聞きながら動きを楽しむことのできる活動でもある。

4. 音や声、リズムを利用した動きや模倣活動

A. 「オイチニであたま」(筆者作)

言葉かけによる遊びをおこなった。例えば、“歩いて歩いて おなか”や“ゴロゴロ お手々は上に”など動作を言葉で語りかけ、言葉かけとともにギロやマルチトーンタンク等楽器や音の出るものを使い、いろいろな音に親しむことができるようにした。

保育者自身が楽器や効果音の工夫をしなければならずリーダー達が、楽器の効果的な音色を出すことに苦慮している姿が印象的であった。

5. 総合的な表現活動

今回、この項目では楽器を使った活動を主に取り上げた。楽器については、どの園でもすぐに用意できるタンブリン・カスタネット・すず

のみを使用し、ガラクタ楽器ではいろいろなガラスびんを使って音の創作をおこなった。

A. 絵本に効果音をつける (グループ活動)

タンブリン・カスタネット・鈴のうちふたつのみ使用し、下記の絵本に効果音をつけていく。限られた楽器での奏法の工夫、すなわち、ひとつの楽器の表現奏法を深めるためにおこなった活動である。また、楽器が限られているため、声や動き・リズムの表現も求められ、総合的な表現力が身に付く活動でもあった。

- ①「とらたとおおゆき」(なかがわりえこ 福音館書店)
- ②「がちゃがちゃどんどん」(元永定正 福音館書店)
- ③「そしたらそしたら」(谷川俊太郎 福音館書店)
- ④「つきよのおんがくかい」(山下洋輔 福音館書店)

B. ビンを使った音作り (グループ活動)

各自のビンに折り紙で色の目印(3種)をつける。リーダーは、割り箸にその3種の折り紙を貼り付けたものを指揮棒として使う。リーダーの出す色と同色のビンの人が音を出すのだが、紙や棒の動きに合わせて音色を工夫しなければならない。この活動は、音を出す人よりも指揮者になった人の方が、合図の方法が分からず、動作の小さかったことが印象的であった。

このような活動には音楽の素地が必要であり、保育者自身の音への気づき、感性がいかに重要であるかを再認識した。

【2, 3歳児担当者対象の主な内容】

1. 歌の歌詞に合わせて動きをつけていく

A. 「コロコロポンポン」(筆者作)

曲に合わせて、いとまきの動作や手たたきをする手遊びをおこなう。

B. 「こぶたさんがいえをたて」(外国曲 作詞不明)・「カニさんど〜こ」(鈴木みゆき 詞 和泉粧子 曲)
歌に合わせて手遊びをする。

C. 「どんぐりきのこおいも」(増田裕子 詞・曲)
手遊びをおこなう予定であったが、全体的に緊張している様子だったため、この曲を使ってフルーツバスケット遊びをおこなった。
楽しんで活動に参加できるよう工夫したが、なかなか立ち上がろうとしなかったり、反射的に動くことに慣れていない様子が見られた。

- ① 3種のカードをぶら下げ、サークルになって「どんぐりきのこおいも」を歌いながら手遊びをする。
- ② 歌の最後に指名されたカードの人だけサークルの中央に出てきて、歌をうたいながら手拍子にあわせて歩く。どんぐり(どんぐりころころ)・きのこ(きききのこ)・おいも(やきいもグーチャーパー)

2. 歌の部分リズムに合わせて動きをつけていく

A. 「しあわせなら ○○さん」(アレンジ者不明)
4, 5歳児担当者対象でおこなったものだが、好評であったため、このグループでもおこなった。
よく知っている曲の意外な使い方に緊張がほぐれていく様子が見られた。

3. 歌とリズムや模倣表現を関連させる活動

A. 「まほうのハンカチ」(布あそび)

これは、子どもにハンカチを持たせるのではなく、保育者がハンカチを歌に合わせて動かしていくという見せる活動として取り上げた。軽くリズムカルな動き、重くゆったりした動きを視覚を通して感じることの大切さをねらいとした活動である。

- ① ピアノのトリルやトライアングルのトレモロ音に合わせて、“さあさあ まほうの

ハンカチですよ 何に変身するのかな？
チチーン プイ”

- ② 『ちょうちょ』に変身，“ちょうちょ
ちょうちょ なのはにとまれ なのはにあ
いたら ○○ちゃんにとまれ”と歌いなが
ら、子どもたちの鼻や耳・肩などにとまる。
- ③ 『うさぎ』に変身、同じく「ちょうちょ」
の旋律を使い，“うさぎさん うさぎさん
ピョンピョン うさぎさん ピョンピョン
ピョンピョン ○○ちゃんのところ”と歌
いながら、子どもたちのあたまやほっぺな
どにとまる。
- ④ 『へび』に変身、同じく「ちょうちょ」
の旋律を使い，“へびさん へびさん ニ
ヨロニヨロ へびさん ニヨロニヨロ ニ
ヨロニヨロ ○○ちゃんのところ”と歌い
ながら、子どもたちのせなかや足などにと
まる。

子どもたちは、先生が自分の所にとまっ
てくれることを期待しているので、保育者
は手や布の動きを変化させながら子どもた
ちの間を動き、演じながら子どもたちに働
きかけるとい活動である。

B. 「ボールのおひっこし」(グループ活動)

「カップおとし」(まきごろう 詞 曲)
の曲をアレンジして使う。

キリンとうさぎのカードを用意し、黄ボ
ールはキリン、赤ボールはうさぎのカードの所
に運ぶ遊びである。“きいろい(あ〜かい)
ボールさん、ひっこししましょ、そろそろそ
ろそろ(ピョンピョンピョンピョン)、ひっ
こししましょ”と歌いながらおこなうのだが、
2グループに分かれひとりずつ順番に始め
ると、グループで歌をうたってリズムをとるな
ど、とても協力的な取り組みがおこなわれて
いた。また、すぐに子どもたちとおこなって
みたいという意見も出された。

4. 音や声、リズムを利用した動きや模倣活動

A. 「くるくるへびで遊ぼう」

音と動き、リズムの遅速を使った活動。

自由に操れる道具を手を持って表現でき
ることで、とても楽しく活発に活動できたよ
うである。

- ① 紙テープを鉛筆でくるくる巻き、その先
に折り紙で作ったへびのあたまをつけてく
るくるへびを作る(木村研 編)。一人
(リーダー)がへびを動かすのに合わせて、
楽器を鳴らす。あるいは、楽器の音に合わ
せてへびを動かす。ジャンプやグルグル・
ピューンなど2人でいろいろな動きのかけ
合いを楽しんでいた。
- ② 「へびさんとおさんぼ」(筆者作)の歌
に合わせてくるくるへびとおさんぼをす
る。速さがはやくなると、凧揚げの要領で
へびを上にあげ、空とぶへびさんにしてか
け足を楽しんだ。

5. 総合的な表現活動

4, 5歳児担当者対象では、簡易楽器・ガラ
クタ楽器を使用した。このグループでは身近
な道具として紙皿を使用し、また、カラフルで
簡単に音の出せる楽器としてブームワッカーを
使った活動を提案した。

A. 「ブームワッカーバトル」(グループ活動)

ピアノで演奏される曲を聴きながら、7人
グループで一列にうつぶせになって寝る。ピ
アノの音がとまったら一斉に起きて、前方に
並べられているブームワッカーを取りに走
る。

ブームワッカーは6本用意し、ブームワッ
カーを取ることのできなかった人が指揮者
になり、グループ全員で「きらきらぼし」を演
奏するという活動である。

ゲーム的要素が強いため、ブームワッカー
取りに熱中する反面、指揮者をする時にと
ても恥ずかしがっていたのが印象的であった。

B. 「紙皿シアター」

一枚の紙皿を折るなどして、黒丸シールと

せんたくばさみを使って動物などを作り、それらを動かしながらショートコントを創作して発表するという活動をおこなった。

紙皿一枚にもかかわらず、金魚やえび、フクロウにかたつむり、たこやうさぎなど、アイデアいっぱいの作品ができあがっていた。

また、発表の際には歌を交えたり、途中で変身させたり、声色を工夫したりなど、自分で作った道具を使うということでそれぞれが自由に楽しく表現をしている姿に心をうたれた。

C. 絵本に効果音をつける (グループ活動)

4, 5歳児担当者対象と同様の内容でおこない、使用した絵本は次の通りである。

特に「バスなのね」のグループでは、いろいろなアイデアが使われていて、大変すばらしい発表がおこなわれた。もちろん他のグループにとっても非常に参考になったと思われる。例えば、“バスって楽しい!”ということばをひじと腰を動かしながら発声したり、“ぐわーん”という音では、タンブリンをバタッと落としてみたり (取り扱いには十分配慮がなされていた)、“コロコロ”という音では、タンブリンの周りを棒ですべらせながら音を出したりなど、ユニークなアイデアが使われた楽しい発表であった。

- ① 「バスなのね」(中川ひろたか ブロンズ新社)
- ② 「ふねなのね」(中川ひろたか ブロンズ新社)
- ③ 「いいものみつけた」(かどのえいこ あかね書房)
- ④ 「せんろはつづくよ」(M. W. ブラウン 岩波子どもの本)

講座の中で利用した道具

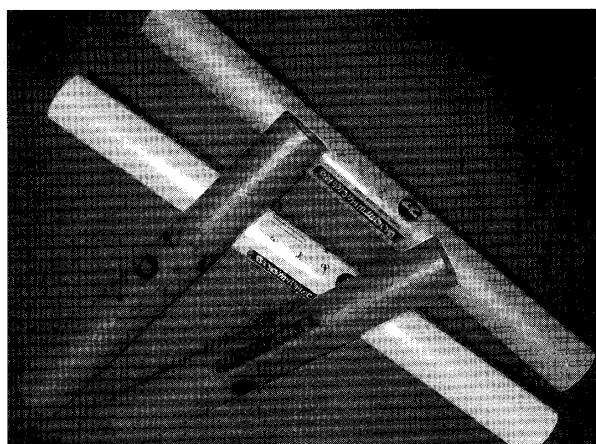
音楽表現活動において道具を使用する場合、その使い方によっては道具がときには遊びの道具と化してしまい、表現活動というよりは、ゲ

ーム遊びになってしまうことがある。そのため道具を使用する際には、それらの道具が活動に必要で、なおかつ適切な物であるかどうかということを十分検討した上で、使用しなければならない。そうすることで、活動はより活発に協働的におこなえるものとなるであろう。

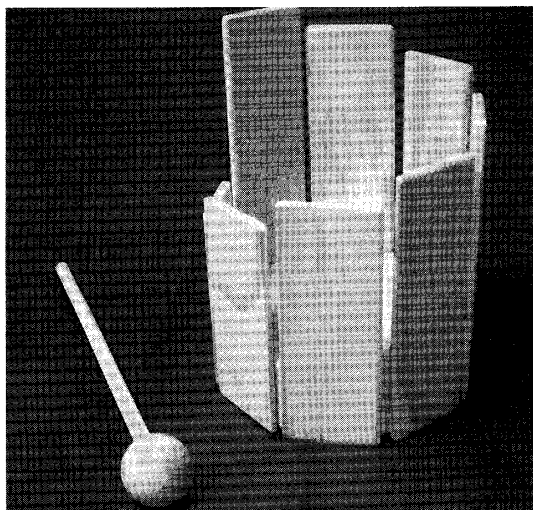
今回の講座においていろいろな道具や楽器を使用したのが、特に、参加者に好評であった物をいくつか下記に紹介することにする。

- ① ブームワッカー
- ② マルチトーンタング
- ③ ロープ
- ④ マグネット
- ⑤ くるくるへび
- ⑥ ○△□カード
- ⑦ やわらかい布

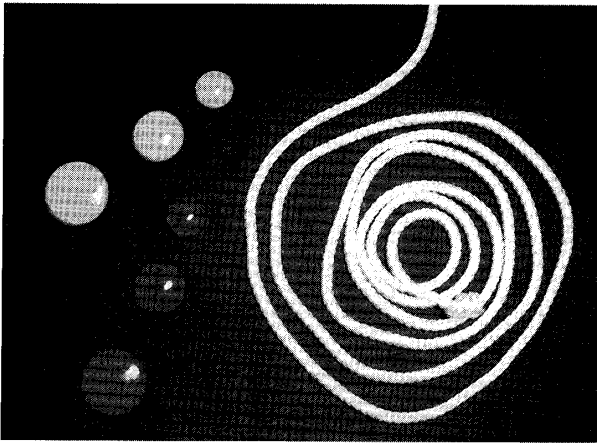
① ブームワッカー



② マルチトーンタング



③ロープ④マグネット



まとめ

まず、今回の講座内容を考案するにあたり、参加者それぞれができるだけ多くのリーダー経験をおこなえるよう内容に留意したが、「歌とリズムや模倣表現を関連させる活動」「音や声、リズムを利用した動きや模倣活動」「総合的な表現活動」において、2人組でのリーダー・グループでのリーダー、そして個人発表・グループ発表という形態の中で、何度かリーダー経験ができていたと考えられる。

全体的な活動だけでは、一人一人がどのように参加しているのか、また、それぞれの参加者の持つ音楽表現の技術や個性を把握することは困難であるが、リーダーをおこなった時には一人一人に応じた助言が可能となり、そのことを通して意欲の向上を図るようにした。

このようなリーダー経験というものは、一人で表現したり他の参加者に働きかけたりすることで、自分の内面と向き合い他の人の表現を取り込んでいこうとするもので、グループ形態による研修では非常に重要な活動であると考えられる。すなわち、リーダー経験によりグループの一員としての意識が高まり、活動への参加がより積極的になるのである。

今回の講座では時間の都合上、受講後のアンケート調査を実施することができなかったが、その後いくつかの園でおこなった音楽表現活動の実践記録を通して、研修内容が保育に生かされていることを窺い知ることができた。

それらの実践記録の中には、さまざまな子どもたちの姿が書かれており、保育者の子どもたちへの多くの気づきが活動の充実につながっていくことを実感するとともに、継続的な研修がリカレント教育に必要であることを再認識したのである。

今後、より質の高い研修を提供できるよう、音楽表現活動における道具の役割や子ども一人一人の表現を受け止めることのできる活動内容の研究をおこなっていきたいと考えている。

【参考文献】

- 仲嶺まり子「保育者のための総合音楽講座」『初等教育—研究と実践—』別府大学短期大学部初等教育児童学会 2004
- 仲嶺まり子「保育者のためのリカレント教育としての「音楽と動き」に関する一考察」『別府大学短期大学部紀要』第24号 2005
- 黒岩貞子『だれでもリトミック』アド・グリーン企画出版 2002
- 石丸由理『リトミック百科』ひかりのくに 2003
- こばやしけいこ『あたらしいリトミック』ドレミ楽譜出版社 2003
- 柳沼てるこ『リズム・ムービング』音楽の友社 2003
- 月刊『クーヨン』1月号 クレヨンハウス 2005